

## [特別支援教育]

## アスペルガー障害の児童の学校生活適応に向けての取組

- 通常の学級と通級指導教室の連携を通して -

田村久美子\*

## 1 はじめに

通級指導教室は、障害の状態が比較的軽く通常の学級で教育が受けられる児童生徒を対象に平成5年から制度化された指導形態である。「一部特別な指導を実施しながら、通常の学級での生活や学習上の困難を軽減するということが、通級による指導の意義や価値であり、大きな役割である。」(廣瀬, 2010)とあるように、大半の授業は通常の学級で行いながら、障害の状態を改善・克服するための自立活動の指導をそれぞれのニーズに応じて受けられるというきめ細かい対応を期待される指導形態である。通級による指導の際はもとより、通級指導担当教員と通常の学級の担任が綿密に連携しながら、校内及び校外の関係者の間で児童生徒の様子や変容の情報を共有することが重要で、また在籍校における理解の在り方や指導の姿勢が、児童に大きく影響する(文部科学省, 2008)ことから、通級担当者としては、保護者や在籍校との連携を密に取りながら指導を進めていくことが重要となる。

## 2 主題設定の理由

A児は小学校6年生の男児である。入学当時から集中力が続かず授業中に動き回ることがしばしばあったため、在籍校から医療機関への相談を勧められた。アスペルガー障害の診断を受け、その後不定期でカウンセリングを開始していたが、2年生時から市内の発達障害通級指導教室への通級を開始した。4年生頃からは自学級には居られたものの授業が全く成立しない状態になり、次第に他教室への出入りや学校内の徘徊が見られるようになっていた。

当校の通級指導教室が平成20年度に新設されたことに伴い、A児が当校に通級を開始したのは5年生の時である。初めは新しい環境と新しい担当者に抵抗があったのか、ほとんど言葉を発せず意思疎通が困難な状況であった。しかし回数を重ねていくにつれて少しずつ心を開き、自分の思いを語るようになり、通級の場では学習が成立するようになってきた。一方、在籍校における不適応行動はエスカレートし、集団からの逸脱行動や教師に対する暴力が頻発するようになり、発達障害の二次障害として考えられる反抗挑戦性障害の様相を呈してきていた。A児の自己肯定感も非常に低くなり、意欲的に行動することや好ましい行動をして称賛されるという経験がほとんどないまま学校生活を送る日々を繰り返していた。中学校への進学を視野に入れながら、A児が学校生活に適応し集団の中で落ち着いて過ごすことができるように、また教科学習を成立させていく手段を確立させていけるように、必要な配慮と活動支援を探る必要があった。通級教室での成果を学校や保護者に伝え、情報を共有化し、共に問題解決に向けて取り組むことができるとA児の行動の問題が改善されていくのではないかと考え、通級の立場から実践を通して検証していくこととした。

## 3 研究仮説

通級教室における個別の指導を充実させ本人への適切な支援を行うと共に、在籍校との連携を図り効果的な指導方法を伝え環境を整えることにより、児童の不適応行動が改善され、学校生活に適応することができるであろう。

## 4 研究の目的と方法

A児の学校生活への適応を図るために、表1のようなプロセスを通して研究を行う。そして、A児の行動観察や連絡ノート等の記述をもとに、A児の変容を時間軸で読み解きながら考察していく。

\* 柏崎市立大洲小学校

表1 学校生活への適応のプロセス

時期	重点事項	長期目標	短期目標および具体的支援
第一期	カウンセリング等の指導を中心とする時期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 担当者と1対1の信頼関係を構築し自己肯定感を高める。</li> <li>・ 意欲的に学習に取り組むことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① かかわる楽しさを経験する活動；対人レクリエーションや運動遊び、調理実習など担当者と協力して活動できる内容を多く取り入れ、A児が人とかかわる楽しさに気づきながら1対1での信頼関係を構築していけるよう支援する。</li> <li>② 自己肯定感を高める支援；成功体験や成就感を味わわせることにより自己肯定感を高めていく。A児と交渉しながら本人が取り組める課題の内容と量を調整する。</li> <li>③ 連絡ノートの活用；在籍校担任、保護者、通級担当の三者で連絡ノートを回覧する。A児の生活の様子や困り感、指導内容等を共通理解し支援に役立てると共に称賛の機会を増やすようにする。</li> </ul>
第二期	学習を成立させる時期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 在籍校で実行可能な学習や活動のレポーターを増やす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 学習習慣の確立；A児にとって抵抗の少ない、興味をもって取り組める課題を余暇活動とセットで提示しながら好ましい行動のパターンや学習習慣を確立させる。</li> <li>② 学習意欲の育成；共に活動することにより担当者の指示に対する反応性を高めるソーシャルスキルを身につけるようにする。A児の気持ちに寄り添いながら、学習することの意義を知らせる。</li> </ul>
	環境整備を図る時期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 在籍校との連携を図りながら具体的な支援方法を探り協力的に支援する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 在籍校訪問；年間3回程度の在籍校訪問を行う。授業の様子を参観し、学級担任やコーディネーター、管理職とのケース会議を行う。</li> <li>② 専門機関とのコーディネート；専門機関の臨床心理士を交えたコンサルテーションを行い、A児の支援方法についてアドバイスをもらう。在籍校で実行可能な環境調整について話し合い、環境を整える。</li> </ul>

## 5 研究の実際

### (1) 第一期～カウンセリング等の指導を中心とする時期（小学校5年生）

#### ① 児童の姿と長期目標

A児は障害特性や環境要因等が相まって、信頼できる大人と良好な関係を結ぶことが難しい状態にあった。不適切な言動で意思表出する場面が多いため叱責を受けることが多く、自己肯定感が非常に低下している状態であった。

そこで、A児が人とかかわる楽しさに気づきながら、1対1での信頼関係を構築していけるようにすることが支援の前提であると捉えた。またA児の学習意欲を引き出し、自己肯定感を高めていけるよう支援していくことが必要と考え、第一期では次のような長期目標を設定した。

#### 第一期 長期目標

- 担当者と1対1の信頼関係を構築し、自己肯定感を高める。
- 意欲的に学習に取り組むことができる。

#### ② 活動内容

第一期は週1回3時間の通級指導を行った。主な活動内容は表2の通りである。

表2 第一期 活動内容

		国語	算数	その他	SST	認知学習
5 学 年	前 期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 漢字カードを作ろう</li> <li>○ カードを読もう</li> <li>○ なぞなぞ</li> <li>○ 身の回りの漢字を書く（住所・教科名・学校名・生年月日・病院に関する漢字）</li> <li>○ パソコンソフト</li> <li>○ ローマ字入力（名前・</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 九九</li> <li>・ 暗唱</li> <li>・ カード作り</li> <li>・ プリント</li> <li>・ パソコンソフト</li> </ul>	都道府県 クイズ	<ul style="list-style-type: none"> <li>(5～6月) ジェンガ</li> <li>キャッチボール</li> <li>黒ひげ危機一髪</li> <li>オセロ・ビンゴ</li> <li>射的ゲーム</li> <li>(7月) 風船バレー</li> <li>サッカー</li> <li>(9月) みたらし団子作り・</li> <li>トランプ・オセロ・かるた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アイロンビーズ</li> <li>ウオーリーを探せ</li> <li>豆うつし</li> <li>ことばシャッフル</li> <li>まちがい探し</li> </ul>

後 期	50音・しりとり・教室にあるもの・虫の名前等) ○身の回りの漢字（都道府県・四字熟語） ○1年漢字の書き・人名の読み・カタカナの書き ○2年漢字の読み・3年漢字の読み	○たし算，引き算・プリント  ○かけ算の筆算  ○電卓を使って	クリスマスリース作り	(11月) バドミントン バスケットボール テニス (12月) クッキー作り (1～2月) ボーリング 輪投げ・ぐらぐらタワー (3月) 野球・ドッジビー	アイロンビーズ (共同制作) まちがい探し ミッケ
--------	--	---	------------	---	------------------------------------

### ③ 指導の実際

#### ア 信頼関係作り

A児が興味をもって取り組める活動を共に行った。主に運動遊びや対人レクリエーション，ゲーム，調理実習などである。年度当初は自分の思いが優先するあまり，相手の気持ちを考えて協力して活動を楽しんだり，力を加減しながら活動したりすることが難しかった。しかし次第に笑顔が見られるようになり，自分の気持ちを言葉で表現したり，協力しながら活動したりする場面が増えてきた。在籍校が代休の日に通級に来たので「今日は学校が休みだったのに，良く来てくれたね。」と言うと「だって，楽しみじゃん。」と答えた。好きな本と一緒に見ようと「先生，早く来て。」と誘ってくれたり，アイロンビーズで分からないところがあると「先生も手伝ってよ。」と支援を求めたりするようになった。A児にとって通級の場が安心できる場所，楽しい活動ができる場所になってきていると感じた。

【連絡ノート：学級担任より】 Aさんが通級教室で生き生きと活動している様子がよく分かり嬉しく思います。通級が終わって学校に戻って来た日は表情が落ち着いていて，午前中の学習が成立することがあります。Aさんにとって，自分を出せる場所，楽しい活動がそうさせているのだと思います。

同時に，担当としてもA児に要求や指示を示すことが可能になった。A児もそれに対して受け入れたり，時には反発したりしながらも，次第に気持ちの交流ができ，指示に応じてくれる場面が増えてきた。

【連絡ノート：通級担当より】 ローマ字打ちではAさんが「もう疲れた。ここまでで終わり。」と最初の目標から下げたので最後までやるように言うと，「無理。できない。」「死ぬ。」を連発していました。しかし少し経つと「先生はわがままだなあ。」と言いながら，最後まで課題をやることができました。「えらいね。ちゃんとできたんだね。すごいすごい。」と褒め，休憩を入れました。正直，Aさんの気持ちと最初の約束のどちらを優先するか，悩むことも多いのです。[中略]でも，最後に「ここまでできたね。頑張ったよ。」と返してあげることがAさんのやる気や自信につながるのではないかと思います。

#### イ 学習への取組

「学習や作業」と「余暇活動」をセットにすることにより，課題をこなした後は好きな活動が出来ることを提示した。その結果，漢字や計算など約束した課題に少しずつ取り組めるようになった。在籍校へも，学習や作業と余暇活動をセットにして提示することによりA児が納得し，学習が成立することを伝えた。それを受けて，学級担任は授業の最初にA児に学習プリントを渡し，その学習が終了したら自分の席で絵を描いたり読書をしたりしてもよいという行動パターンを提示した。プリントの内容は文字を点線に添ってなぞる国語のプリントや，簡単な計算プリントであるが，少しずつ学習が成立し，授業時間と休み時間の区別が付き始めた。授業時間の最初の10分から15分は決められた学習プリントに取り組み，終わると教師に提出し許可を得た後に，自分の席に着いて静かに好きな活動に取り組む姿が定着し始めた。

【連絡ノート：通級担当より】「じゃあ，勉強始めようか。」と言うと「よし，やろう。」と気合の入った返事が聞かれ，嬉しく思いました。ローマ字入力はいよいよ2枚目に入りました。毎回プリントアウトして保存。ファイル名の日付を変えるのが楽しみな様子で「これでよし。」と満足そうなAさんです。

保護者とは毎回の送迎の際に情報交換を行ってはいたものの，連絡ノートに記入してもらえることはほとんどなかった。しかし，在籍校の担任にも伝えたいという気持ちから家庭での様子について下記の様な記述があった。A児とのかわり方を保護者として見つめ直す記入が見られるようになり，三者が成功体験を報告し合うことが増えた。叱責中心

のかかわりから、できたらほめるかかわり、A児の気持ちを尊重したかかわりへと変容していった。

【連絡ノート：保護者より】 家で「頑張れ。」と声をかけると「守れない約束になるから頑張れない。」と否定的になります。「みんなと同じ行動をとらなければいけない場面や危険なことをしようとする時には少し考えてから行動してね。」と書いてみました。Aは「うん」と返事をしました。叱ってばかりではなく、諭すように言うといいのかもしれない。

【連絡ノート：学級担任より】 学校でも自分から「今日のプリントは何？」と聞いてくるが増えました。プリントが終わると「はい」と提出して、その後は自分の席で絵を描いたり本を読んだりすることができるようになってきました。調子の良い時は休み時間に教務室に来て、プリントをコピーしてほしいと言って、問題集をめくってページを選ぶこともあります。

(2) 第二期～学習を成立させる・環境整備を図る時期（小学校6年生）

① 児童の姿と長期目標

通級を開始して2年目。少しずつ学習習慣が身につき通級担当者とのコミュニケーションがスムーズになってきた。在籍校では授業中の着席行動にも改善が見られ、短時間であれば学習が成立するようになってきていた。しかしながら、A児が学校生活全般をさらに安定して過ごし学習習慣を確立させていくために、一層の連携と支援が必要であると考えた。そこで、通級時間を週3時間から5時間に増やすと共に次の2点を長期目標にして指導にあたることとした。

- 在籍校で実行可能な学習や活動のレポトリーを増やす
- 在籍校と関係諸機関を交えたコンサルテーションを行い学校的环境調整を図ることにより、A児が安定して学校生活を送ることができる。

② 活動内容

表3 第二期 活動内容

		国語	算数	その他	SST	認知学習
6 学 年	前 期	○2年生の漢字書き ○ローマ字打ち 「わらぐつの中の神様」 ○短作文～パソコン ○ローマ字打ち ～教科書視写 ○漢字プリント	○計算プリント ・かけ算筆算 ・かけ算文章題 ○パソコンソフト ○お金の数え方 ○電卓 ○計算プリント	図工 ～紙コップを使った作品作り（5作品） ～箱作り ～ビックリ箱作り ～輪ゴム鉄砲作り ～畑の作業	(4月) 五目並べ キャッチボール 神経衰弱ゲーム 風船バレー・卓球 バドミントン (5月) ケーキ作り (7月) 卓球・ いももち・べっこう飴 (10月) プリン・ゼリー ポップコーン (12月) おでん作り (2月) 生チョコ作り カーリング (3月) クッキー作り	まちがい探し 形探しプリント アイロンビーズ ジグソーパズル 積み木パズル 脳トレクイズ
	後 期					

③ 指導の実際

ア 学習や活動のレポトリーを増やす

本人の気持ちを尊重し、1,2年生の教科書を使った学習ではなく、生活に役立つ内容、本人の意欲を引き出すような内容を取り上げていった。また、書く学習に対する抵抗が強いためA児の得意なパソコンを使用し、ローマ字入力を取り入れることとした。スタート時は「昆虫の名前を10個」「寿司ネタを10個」などとテーマを決めて入力していたが、後期にはローマ字一覧表を見なくてもスムーズに入力できるようになり、5年生の国語の教科書の中から「わらぐつの中の神様」の物語をパソコンで視写することができるようになった。

また在籍校でも実践できるように、「プリントの枚数を決める→課題を選ぶ→着席行動→提出・許可→好きな活動」という学習パターンを繰り返し行った。それと同時に、A児が学校生活の大半を過ごす学習室での活動のレポトリーを増やすために、A児と活動内容を話し合いながら模索していった。間違い探しプリントや、ペーパークラフト等、社会的に認められ静かに過ごすことが出来る活動レポトリーを増やすように取り組んだ。後期には、通級教室の場では45分から60分ほどは連続して教科学習に取り組めるようになった。また玄関で担当者と保護者が話をしていると一人で

教室に上がり、自主的に学習を始める姿が見られるまでになった。

【連絡ノート：通級担当より】 15分ほど一緒にアイロンビーズをやった後「そろそろ勉強する？」と言うと、すぐにパソコンの所に移動しました。私はまだ作りかけだったので「え？もう始めるの。」と驚いて言うと「先生は、それ最後までやっていいよ。おれ、先に勉強してるから。」とのこと。Aさんが自分から学習に向かおうとする姿が見られてとても嬉しく思いました。

【連絡ノート：学級担任より】 エナメル線で小物を作っています。クラスメートにも大人気の小物で、早く作って欲しいという注文の音がたくさん聞かれています。人のために作ることを喜んでいることが私も嬉しいです。

個の活動や学習が充実することに伴い、集団での活動へ参加できる場面が増えてきた。それまでは拒否していたクラスの行事や練習などにも促されると参加し、活動の幅を広げることができた。

【連絡ノート：学級担任より】 水曜日は全校縄跳び大会でした。Aさんは体育の練習の時から参加し、大会でもみんなと一緒に跳んでいました。みんなの輪の中で一緒に活動する姿はとてもいいものでした。

## イ 環境の整備

### 〈在籍校訪問〉

年に3回程度、在籍校を訪問して授業を参観すると共に、担任教諭、特別支援教育コーディネーター、管理職とコンサルテーションを実施した。通級で行っている学習やSSTの内容を紹介し、その中で学校としても実行可能な内容を取り入れてもらえるよう伝え、支援のあり方について話し合った。担任が提示した抵抗の少ない課題をA児が遂行し担任が称賛を行う、課題を終えた後は好きな活動を行っても良いという学習のパターンを定着させる。それを繰り返しながら担任とA児との1対1の関係性をまず確立していくことが望ましいという内容を伝えた。

### 〈専門機関との連携〉

学級内のみでなく学校全体の環境を整備していくためには、より専門的な立場の人から意見をもらった方がよいという判断から、在籍校の担任、管理職、通級担当、臨床心理士によるコンサルテーションを行い、学校で実行可能な環境整備について話し合いを持った。通級教室における活動について理論的なフォローを入れてもらいながら、A児の不適応行動を軽減させるためにはA児自身の変容と共に環境整備が必要である旨を臨床心理士から学校へ伝えた。その結果、学校側は下の2点について実行可能であると、了解を得ることができた。

#### ① 学級の座席アレンジ

教室から出ないようにという考えから一番窓側の座席であったが、一度退室すると改めて入ることが困難である。そこで、廊下側前方の席に変更し、教室への出入りがしやすいように、また大勢の児童の中にいるプレッシャーを感じさせないように配慮する。壁に「〇〇に行きます」のカードを用意しておき、A児の居場所が担任や友達に分かるように工夫する。担任の許可を取ってから退室することをA児と約束する。但し、目は離さず必ず職員がついていくか退室先は職員がいる場所限定とすること。

#### ② A児の居場所作り～タイムアウト・個別支援のスペースの確保

課題をやった後に一人で好きな活動に没頭する環境、集団の中にいる緊張から解放される場がA児には必要である。資料室として利用している空き教室をA児のためのスペースとして利用させてほしい。

学校側はすぐに資料室の整備に着手し、1週間後にはA児の個別の学習室として利用できるようになった。この結果、A児は担任と約束した課題に取り組み、その後担任から許可を得て学習室を利用しながら落ち着いて学校生活を送る姿が見られるようになった。学習室を提供することの効果として、自学級での姿も改善されてきた。

【連絡ノート：学級担任より】 専用の学習室ができたことを喜んでいるようです。学級で修学旅行の話し合いに参加しているときも安定している様子でした。個別と学級のけじめをつけていけると良いと思います。

【連絡ノート：学級担任より】 最近は隣のクラスに行かず、自分の学級で過ごすことが多くなりました。学習室と教室の2つの場所を上手に使えるようになったのかなと感じています。



## 6 考察

### (1) 成果

小学校の卒業を間近に控え、A児は在籍校で学級と個別の学習室を活用しながら落ち着いた学校生活を送っている。授業中は前半にプリント学習に取り組み、その課題が終わると好きな活動ができるという学習パターンが定着しつつある。通級を開始した当初は自己肯定感が低く生活全般に意欲が乏しい状態であったが、「将来は車の免許が取りたい。」「パティシエになって、みんなにお菓子を食べてもらいたい。」「漢字が読めないのは不便だ。」「漢字を形で覚えられるようになったから大丈夫。」という前向きな発言が聞かれるようになった。A児の行動の問題が軽減し、学校生活への適応に成果が見られた要因として考えられるのは次の3点である。

#### ① 1対1の信頼関係を構築する

- ・指導を成立させるために、まずA児の感情を理解し寄り添いながら楽しさを共有することにより、A児にとって通級の方が安心できる場所、リラックスして自分を開示できる場所になっていったこと。
- ・A児が興味をもって取り組むことのできる活動を通して成功体験を増やし、自己肯定感を高めていったこと。

#### ② 通級教室での成功体験を在籍校へつなぐ

- ・学習課題と余暇活動をセットにして提示することにより学習意欲の向上を図り、学習習慣の確立を目指した。「できない」「やりたくない」→「約束したでしょう。」「これが終わったら～ができるよ。」という問答や交渉を何度も繰り返し、A児の「やりたくない」→「不適応行動」のパターンを崩していった。

#### ③ 学校の環境調整

- ・A児の変容を支援していくと同時に、学級や学校の学習環境や支援体制等、A児を取り巻く環境を変化させていかなくは行動の問題は改善されないと考え、何度もコンサルテーションを行った。在籍校でも安定して過ごせる環境を整えたことでA児の不適応行動が軽減し、集団活動に参加できる場面が増えた。これがA児に対する周囲の見方の変容にもつながった。学校の環境調整を行ったことが、間接的にA児に対する有効な支援として届いたのだと考える。

【連絡ノート：学級担任より】 穏やかな表情が多くなったなという感じがしています。中学校の体験入学では美術の勉強をしましたが、ちぎり絵の配色や作り方が上手でほめられたそうです。中学校での学校生活がスムーズにいく感じがしてきました。

### (2) 課題

A児の通級指導を担当して2年。開始した当初は意思の疎通がスムーズにいかず、A児とのレポート形成に苦慮したが、活動を共にするにしたがいA児の思いに寄り添いながら指導することが可能になった。在籍校の担任とは話し合いの機会を何度も設定してきたが、学校生活への適応や学習習慣の確立を目標として指導していたため、通級教室と学校で行う学習課題の共有化を図ることが難しかった。教科や大まかな内容などは決めていたものの、同じ内容に統一することができればA児の適応がもっと促進され、学力の向上が図れたのではないかと考える。

A児は中学校で特別支援学級に在籍することとなった。今後も個別の指導を受けながら学校生活に適応することを目指していくこととなる。在籍校や通級教室で身につけた活動のレパートリーをさらに充実させながら、今後も生き生きと生活してくれることを望む。そのために通級教室の担当として出来ることを今後も模索していく。

## 引用文献・参考文献

- 東條 恵 「発達障害ガイドブック」 考古堂 2004年
- 田村節子 「軽度発達障害の子どもに対するチーム援助のコーディネーションー学校心理学の枠組みからー」 LD研究 第13巻 2004年
- 笹森洋樹 他 「第18回大会企画シンポジウム 通常の学級と通級指導教室の連携による支援」 LD研究 第19巻 2010年
- 能登 宏 「発達障害通級指導教室の指導・支援法」 明治図書 2008年
- 文部科学省 「小・中学校におけるLD（学習障害）、ADHD（注意欠陥／多動性障害）、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）」 2004年
- 文部科学省 「改訂版 通級による指導の手引」 第一法規 2008年